

経済・金融 フラッシュ

5月マネー統計 ～積みあがってきた預金に変化

経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志

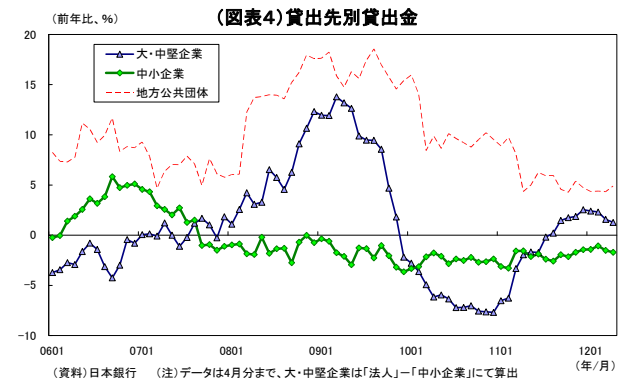
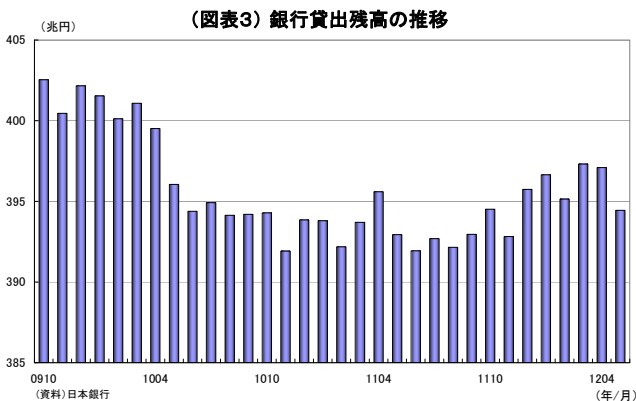
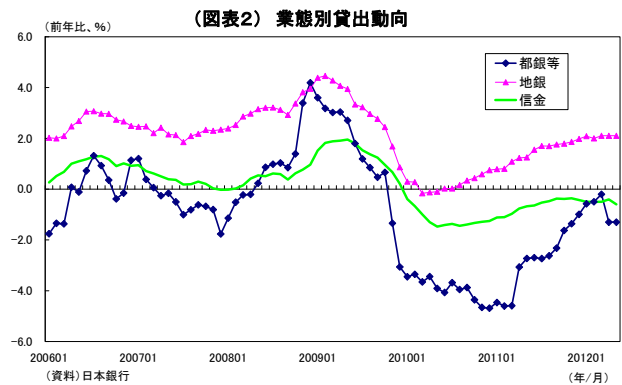
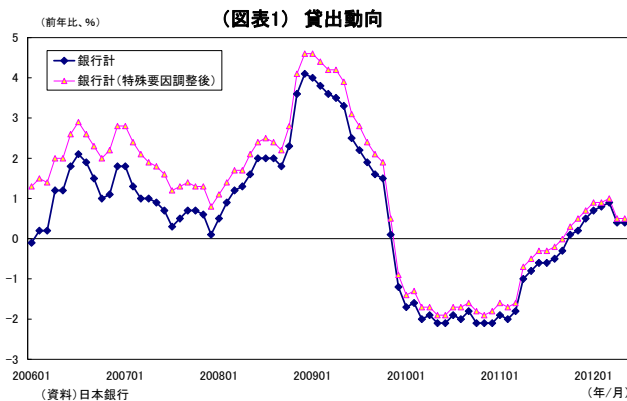
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

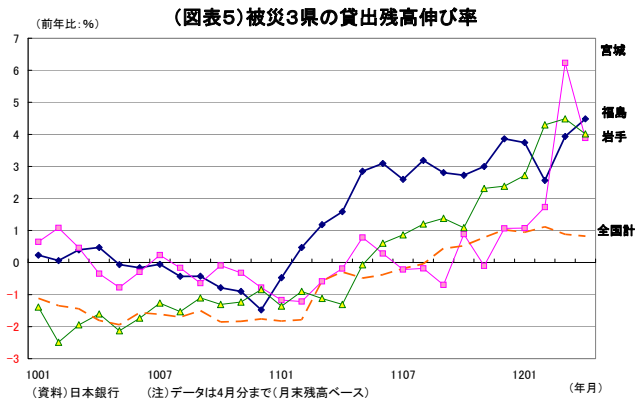
1. 貸出動向：伸び率は横ばいに

日銀が発表した5月の貸出・資金吸収動向等によると、銀行総貸出(平残)の前年比伸び率は0.4%(前月も同様)と、前月から横ばいになった。業態別で見ても、地銀が前年比2.1%増、都銀等が同▲1.3%減と、それぞれ前月から変化は無かった(図表1～5)。

銀行貸出は堅調な推移を示しているものの、伸び率の改善には一服感が出てきている。

これまでの改善を後押ししてきた電力会社向け融資、M&A資金、復興関連需要の3本柱による寄与は今後とも期待されるため、銀行貸出は当面プラス圏を維持すると考えられる。ただし、5月以降の欧州危機再緊迫化は懸念材料。企業マインドが大きく悪化する事態になると、設備資金を中心とした資金需要にも悪影響を及ぼしかねない。



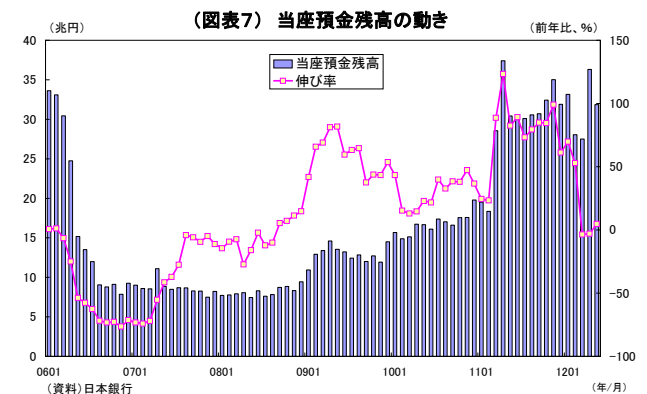
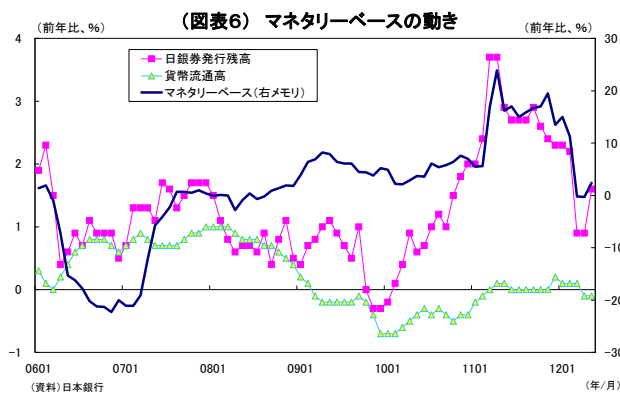


2. マネタリーベース：3ヵ月ぶりに前年比プラス化

日銀による資金供給量(日銀当座預金+市中のお金)を示す5月のマネタリーベース(平残)伸び率は前年比2.4%(前月は同▲0.3%)と、3ヵ月ぶりにプラスに転じた。日銀当座預金の伸びが前年比4.7%(前月は同▲2.9%)とプラス化した影響が大きい(図表6,7)。

今回の3ヵ月ぶりのプラス化は、比較対象となる昨年3~4月に、震災への対応として日銀が大量に資金供給を実施しマネタリーベースが急増した後、5月に減少した裏が出た形となっており、日銀の最近の緩和姿勢の変化を表しているわけではない。実際、5月のマネタリーベース残高は国債発行等の財政要因(当座預金減少要因)から前月比4.4兆円減少、季節調整済み前月比年率でも▲37.9%減少している。

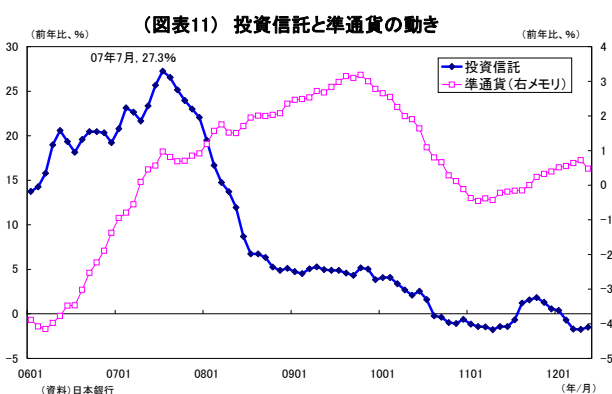
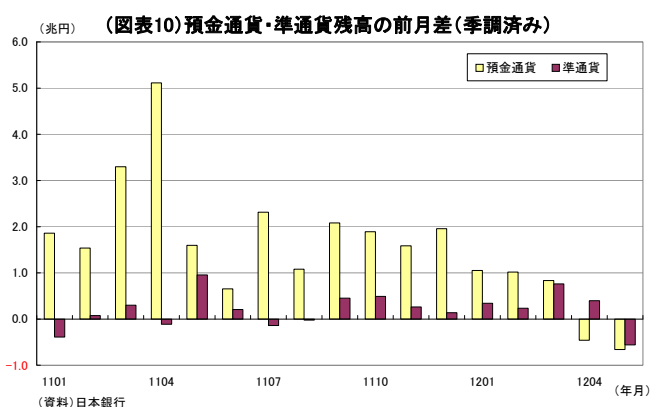
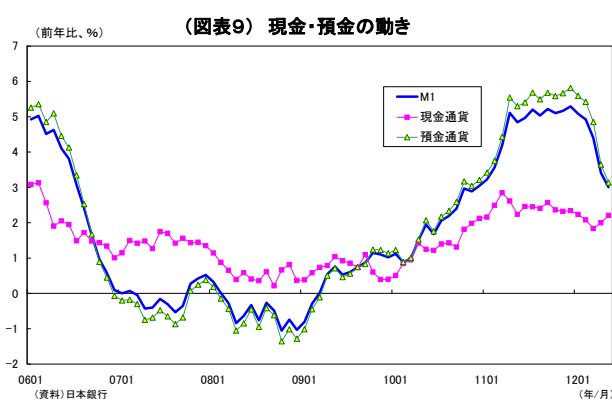
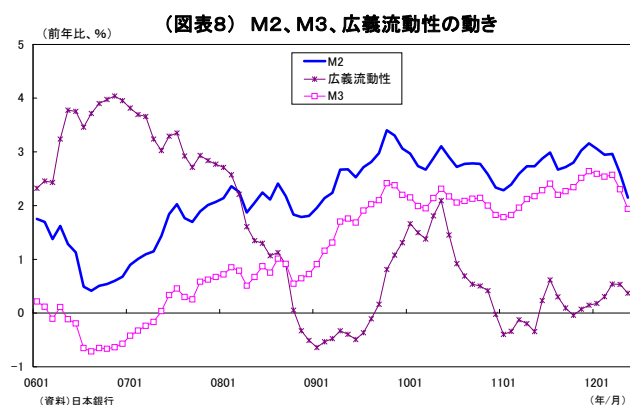
なお、評価としては、前月から減少とはいえ117.1兆円という残高は過去6番目の高水準であり、日銀の強い緩和姿勢に変化は無い。今後とも資産買入を進めていくため、マネタリーベースは高水準かつ前年比プラスを維持する可能性が高い。



3. マネーストック：積みあがってきた預金に変化

通貨供給量の代表的指標である5月のM2（現金、国内銀行などの預金）平均残高は前年比2.1%増（前月は2.6%増）、M3（M2にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む）は同1.9%増（前月は2.3%増）と、それぞれ2ヵ月連続で伸び率が縮小した。M2の伸び率はプラスながら、2009年2月以来の低水準。M3に投信や外債などを含めた広義流動性も同0.4%増（前月改定値は0.5%増）とわずかに伸び率が低下している（図表8）。

M2やM3の伸び率低下は、昨年の震災に伴う増加が一巡した影響もあるが、これまで増加が続いてきた預金通貨（普通預金など）や準通貨（定期預金など）に変化が出てきていることも影響している。季節調整済み系列で見ると、5月は久々に両者揃って前月比で減少となった。この動きが一時的なものなのか、それとも今後も続くのか、続く場合、マネーがどこに向かうのかが注目される。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。